

令和7年度北秋田市ゾーニング管理の実績と評価

令和8年3月

秋田県北秋田市産業部

1. 背景

北秋田市は、国内でも有数のツキノワグマの生息地である一方で、山林を積極的に活用する生活の営みは、人の生活圏からクマを遠ざける機能を果たしてきた地域でもあります。

しかし、人口減少と生活様式の変化の進行に適応するように人の生活圏周辺にクマが定着し、平成19年度以降に新たにクマの分布が拡大した地域（図1）を中心に、住宅密集地へ出没し人身被害が発生するなど、市民の日常生活に支障を来す事態となっており、人とクマの棲み分けに向けたゾーニング管理が急務となっています。

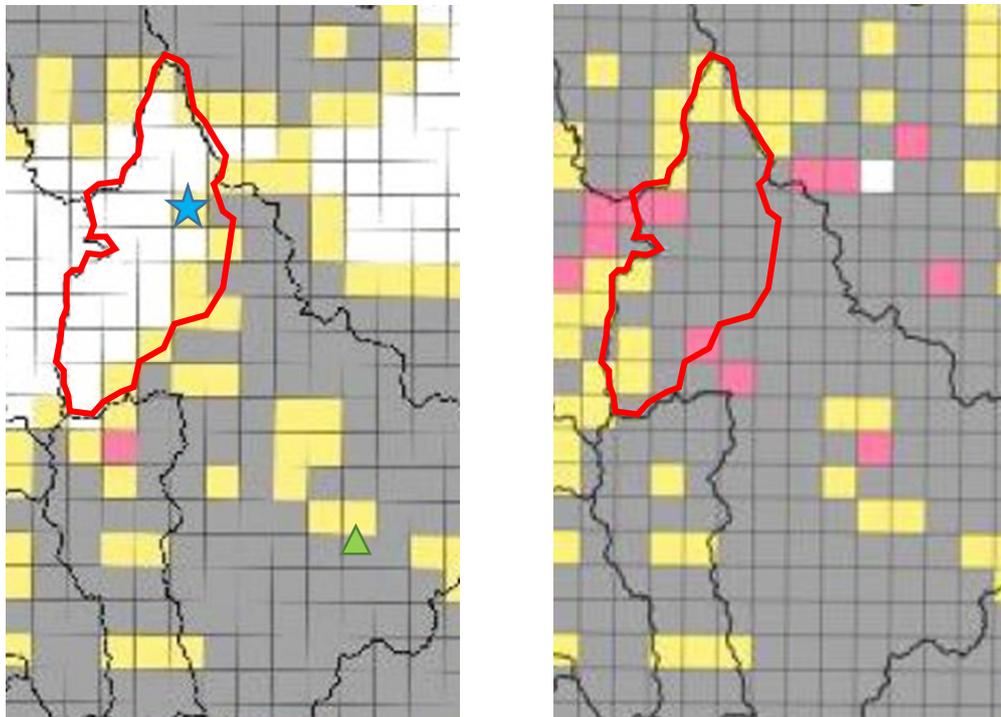


図1 北秋田市におけるツキノワグマの分布の推移

左図着色メッシュ：第2次秋田県第二種特定鳥獣管理計画（平成19年）時点の分布

右図着色メッシュ：第6次秋田県第二種特定鳥獣管理計画（令和7年）時点の分布

赤枠：両期間中に新たに分布が拡大した地域

青★印：北秋田市役所

緑▲印：森吉山

出典：秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第6次ツキノワグマ）資料編 P1

2, 取組

(1) 各ゾーンの設定

秋田県野生鳥獣管理共生ビジョン（令和2年）のゾーニングイメージ（図2）を参考に、これまでのクマの生息分布の推移、近年の目撃情報、住宅密集状況等を踏まえ、試験的な取組として市街地型モデルと集落型モデルの二つのゾーニングモデルを設定しました（図3）。

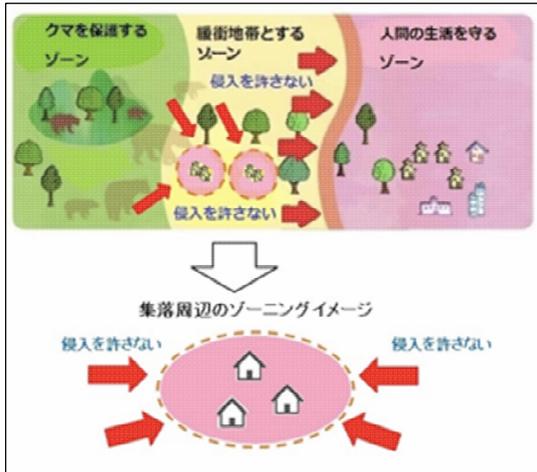


図2 秋田県が考えるゾーニングイメージ（1）
 緑色：「クマを保護するゾーン」、桃色：「人間の生活を守るゾーン」、黄色：「緩衝地帯とするゾーン」を設定するようなイメージ
 出典：秋田県野生鳥獣管理共生ビジョン P23

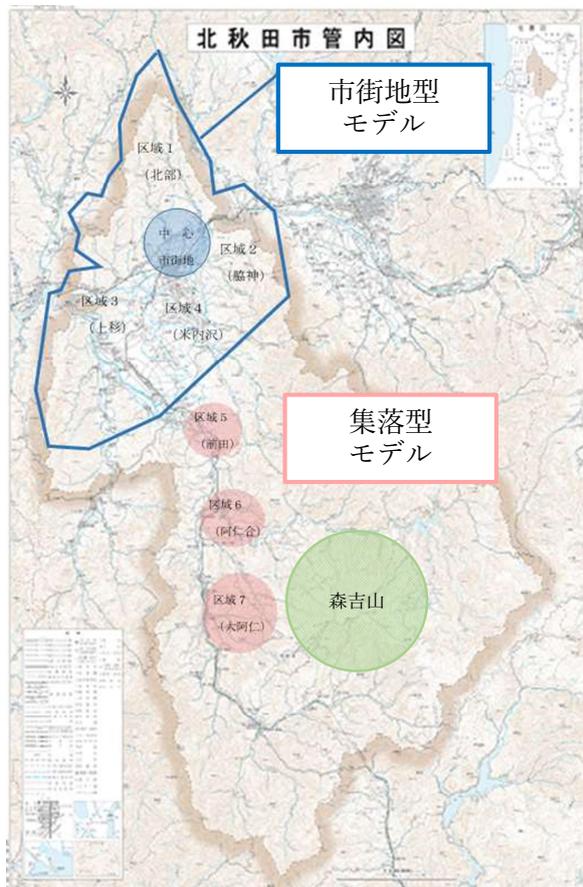


図3 市街地型モデルと集落型モデル

【市街地型モデル】

平成19年以降に分布が拡大した区域（青線内）の中に、「人間の生活を守るゾーン」として鷹巣市街地（青丸）及び大野台辺、「クマを保護するゾーン」として森吉山（緑円と周辺）を中心とする範囲を想定しました

【集落型モデル】

「集落周辺のゾーニング」区域として管理すべきモデルを米代川支流沿いに点在する集落（桃色円をイメージ）としました

(2) 市街地型モデルおよび集落型モデルにおける取組み

秋田県第6次ツキノワグマ管理計画（令和7年3月）のゾーニングイメージ（図4）を参考に、北秋田市における目撃状況や住宅密集状況等を踏まえ、各モデルにおける地域区分と「管理強化ゾーン」の設定を検討し、それぞれを対象に直接・間接的に取組を進めました。

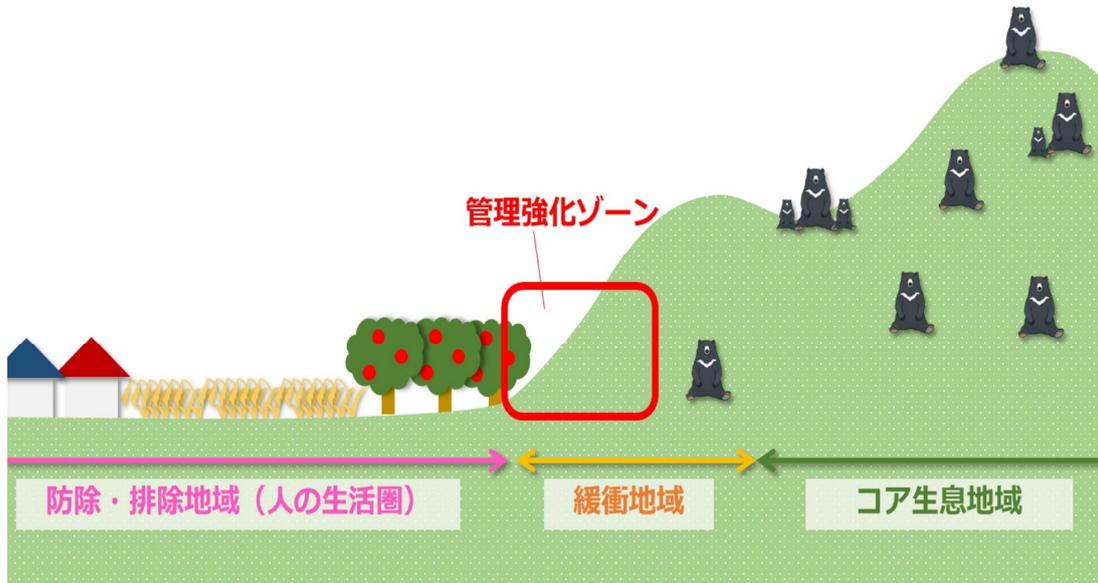


図4 秋田県が考えるゾーニングイメージ（2）

人が日常生活を送る「防除・排除地域」、クマの生息域である「コア生息地域」、それ以外を「緩衝地域」とし、緩衝地域のうち、市街地への出没など、あつれきが特に大きい場所に隣接している地域を「管理強化ゾーン」とするイメージ

出典：秋田県第6次ツキノワグマ管理計画（資料編） P12

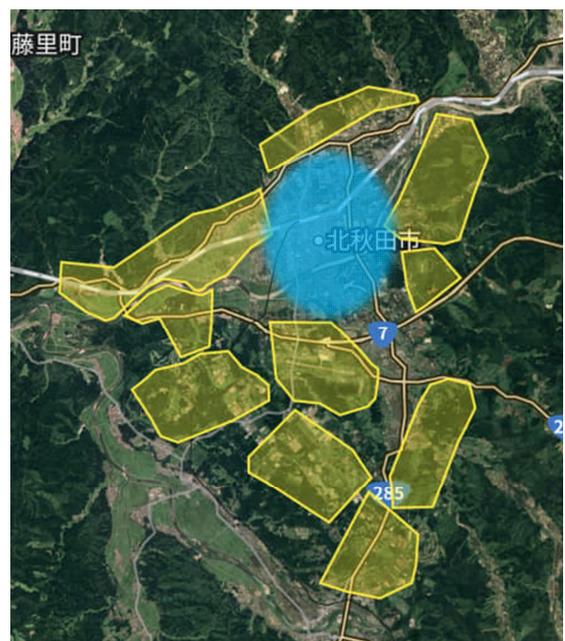
【市街地型モデル】

鷹巣市街地及び大野台周辺を「人間の生活を守るゾーン」、森吉山県立自然公園（国指定鳥獣保護区含む）を中心とする「クマを保護するゾーン」ととらえ、鷹巣市街地周辺と大野台から大野岱に至る範囲を「管理強化ゾーン」とし（図5）、令和7年7～11月（うち農林水産省鳥獣被害防止総合対策交付金（クマ特別対策）支援事業期間は9～11月）には、農地周辺における有害性の高い個体の捕獲（管理捕獲）を強化し、農作物被害および人身被害の未然防止に務めました。

図5 管理強化ゾーン

黄色枠：令和7年7～11月に、有害性の高い個体の捕獲（管理捕獲）を強化

青色：市街地および農地



【集落型モデル】

米代川支流河川沿いに点在する集落等は、「集落周辺のゾーニング」管理すべきモデルととらえ、各地域の実情に応じて有害鳥獣捕獲や放任果樹木伐採による誘因物の除去、刈払い（緩衝帯整備として）等の環境整備する個人・団体を、これまでも北秋田市として支援してきました（図6 参考事例）。



図6 集落型モデル参考事例
阿仁伏影集落の参考事例
黄色枠内：電気柵設置、茶色線内：刈払い実施（緩衝帯整備として）、桃色円内：誘因物の除去として栗の木伐採

3. 実績と評価

令和5年度（左列）、令和6年度（中列）、令和7年度（右列）のクマの目撃数・捕獲数・捕獲檻設置数の月別推移を図7に示しました。市全域の推移を上段、管理強化ゾーン内の推移を中段、管理強化ゾーン以外の推移を下段に分けて記載しています。

市全域では（上段）、クマの餌となる堅果類が凶作であった令和5年度（左列）と令和7年度（右列）の9月～10月にかけて目撃数と捕獲数が多くなっているのに比較して、豊作であった令和6年度（中列）の9月～10月同じ時期が少なくなっています。この違いは、堅果類の実りの状況に主な要因があると考えられます。

市街地型モデルにおける管理強化ゾーン内では（中段）、5月～7月の目撃数が令和5年度、令和6年度、令和7年度にかけて増加傾向にあり、堅果類の豊作・凶作とは関係なくクマと人が出会う危険性が高まっていることが懸念されます。一方で、令和5年度の管理強化ゾーン（左列中段）と令和7年度の管理強化ゾーン以外（右列下段）の8月～9月の目撃数が増加しているのに対し、令和7年度の管理強化ゾーン（右列中段）の8～9月の目撃数が減少していることから、令和7年7月～10月にかけて管理強化ゾーンで管理捕獲を強化した結果である可能性が伺えます。

集落型モデルが点在する管理強化ゾーン以外では（下段）、堅果類が凶作となった令和5年

度（左列）と令和7年度（右列）の9月～10月に目撃数と捕獲数が他の月に比べ急増している一方で、令和5年度より令和7年度の捕獲数が少なくなっているのは、各集落で誘因物の除去や電気柵の整備が進んでいることも要因の一つかもしれません。しかし、目撃数は令和7年度が令和5年度より多い結果となっており、同じクマ（同一個体）が誘因物に執着して繰り返し出没・目撃されている可能性も考えられます。

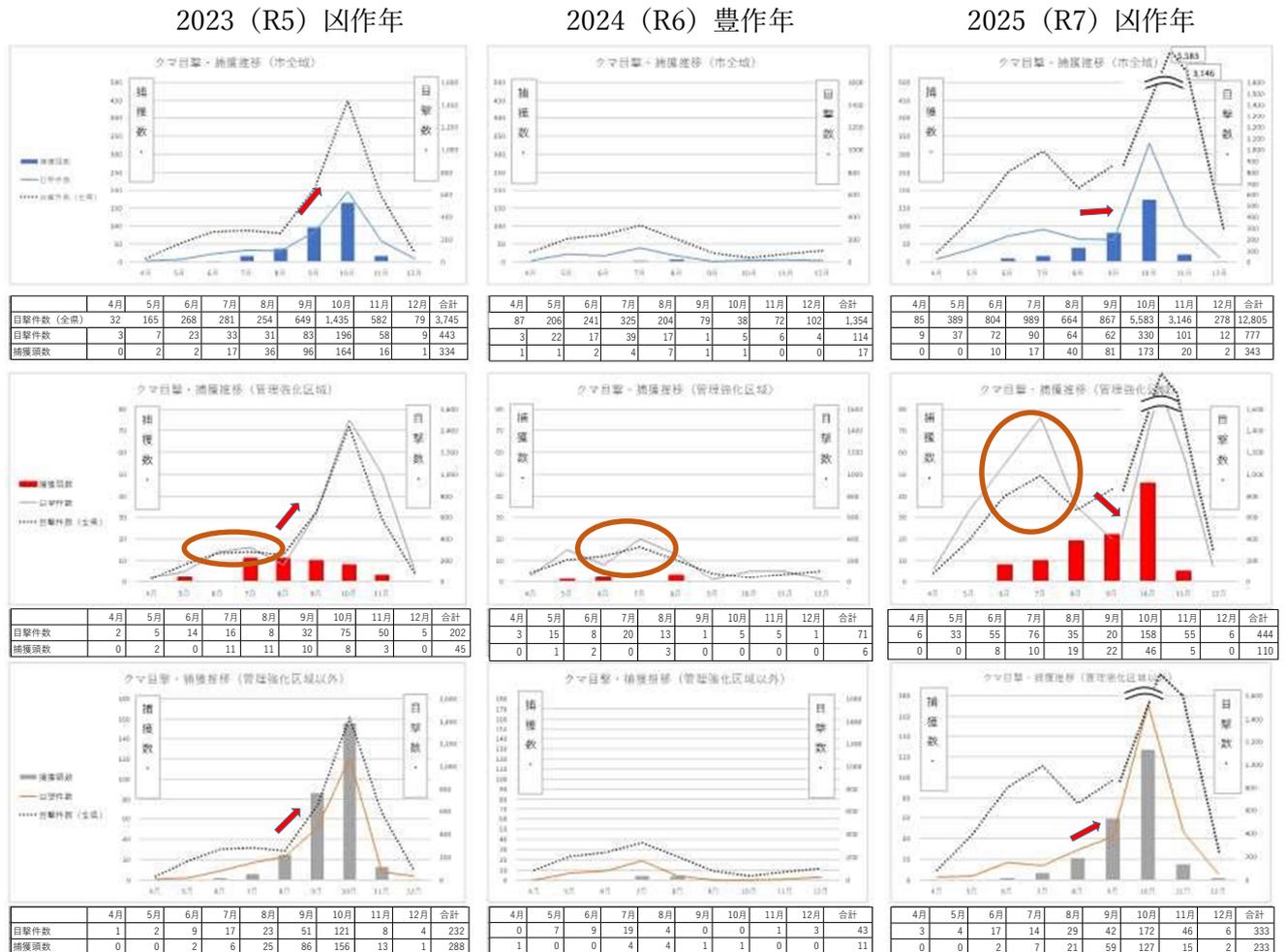


図7 令和5～7年度 北秋田市内クマ目撃数・捕獲数・捕獲檻設置数の月別推移（4～12月）

- 上段：北秋田市全域の月別推移
 - 青実線：北秋田市全域の目撃数推移
 - 点線：秋田県全域の目撃数推移の傾向
 - 青色棒：北秋田市全域の捕獲数
- 中段：管理強化ゾーン内の月別推移
 - 灰色線：管理強化ゾーン内の目撃数推移
 - 点線：秋田県全域の目撃数推移の傾向
 - 赤色棒：管理強化ゾーン内の捕獲数
- 下段：管理強化ゾーン以外の月別推移
 - 黄色線：管理強化ゾーン以外の目撃数推移
 - 点線：秋田県全域の目撃数推移の傾向
 - 灰色棒：管理強化ゾーン以外の捕獲数

4、今後の取組について

人口が増加している時代には、里地や里山を人が日常的に利用していたことから、そうした場所（里地・里山）はクマの生息地と人の生活圏との間に緩衝帯として機能していたと考えられます。一方、平成に入ると人口が減少する時代となり、あわせて生活様式も変化して里地や里山の利用が減少することで、おおよそ30年をかけて徐々にクマが適応し、人の生活圏の周辺に生息するようになったことが、出没増加の要因の背景にあると考えられています（秋田県野生鳥獣共生ビジョン 令和2年）。

そこで、令和7年度は人とクマの棲み分け実現を目指す試みとして、管理強化ゾーンでの捕獲強化を主体とする「ゾーニング管理」に取り組みました。現状では、客観的な効果を示す段階にない一方で、一部の地域からは「出没が少なくなった時期があった」との声も聞かれました。引き続き、地域の実情に応じたゾーニング管理に取り組み、効果を検証していく必要があります（図8）。

さらに、現在は秋田県全域でクマの生息情報があることから、近隣市町村や秋田県全体の状況を踏まえた取組みも必要となってくることが考えられます。また、北秋田市のゾーニング管理の進捗状況を踏まえて、随時、各地域の見直しを図っていくことも想定されます。

【市街地型モデル】

鷹巣市街地は、一旦クマが侵入すると人とクマが出くわす確率が極めて高くなることから、市街地の周辺のクマの個体数を減らしたり、市街地へ侵入しやすい環境を減らすなど、広域的な管理が必要です。また、万が一市街地へ侵入された場合の備えも必要です。さらに、大野台周辺の台地は、平成19年以前にはクマの生息情報がありませんでしたが、耕作地の一部が杉などの樹木にモザイク状に置き換わり、近年、特に目撃情報が増加しており、組織的な管理が必要です。

1) 管理強化ゾーンにおける捕獲強化の継続

鷹巣市街地周辺と大野台周辺のクマの個体密度を低下させるため、令和7年度から取り組んでいる管理強化ゾーンでの管理捕獲を継続して効果を検証していく必要があります。また、「管理捕獲」は被害等の有無に係わらず捕獲活動を継続するため、主体となる鳥獣被害対策実施隊員の負担軽減が必要です。ICT技術を活用した省力化や地域の皆さんを含むサポート体制の検討が必要です。

2) 市街地への侵入ルートの管理強化

周辺の山野から鷹巣市街地へは、クマが身を潜めて行動できる河川の河畔林や草の生い茂った用水路などを利用していることが考えられます。また、山林と市街地や農地が近接している場所では、下刈り（緩衝帯整備）等を実施して見通しを確保したり、電気柵を設置するなど、関係者による防除対策が必要です。

3) 市街地空き家・空き地の管理強化

万が一市街地へ侵入された場合を想定して、空き家や空き地の管理を進め、クマ

の通り道や居座りやすい場所をなくすほか、誘因となる果樹木の管理（除去を含む）など、町内会や関係機関が連携して取り組む必要があります。

【集落型モデル】

市内に点在する集落では、地形や山林・農地等の配置の違いによって、クマが侵入する経路や要因が異なることから、各集落の実情に応じた対策が必要です。

1) 地域ぐるみの取組を推進

集落内にクマを侵入させないためには、集落周辺の地形や山林・農地等の配置を踏まえ、隣接する山林の見通しを確保し居座り環境を改善するとともに、クマの餌となり得る耕作物や果樹等といった誘因物の管理や除去を集落ぐるみで取り組むことが重要です。

2) モデルケースとなる取組のサポートと展開

北秋田市には先行的に取り組まれている集落があることから、市は、モデルとなる取組みが維持されるよう伴走支援するとともに、他の地域への展開に取り組む必要があります。

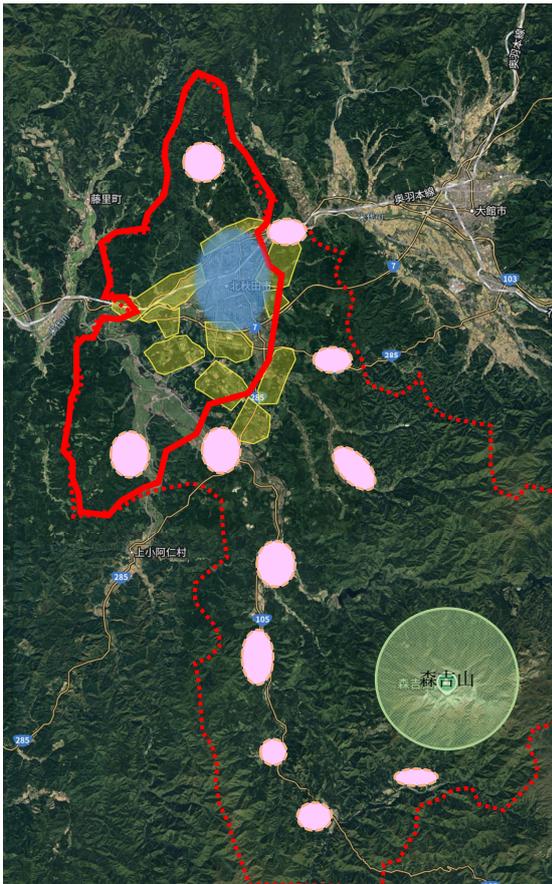


図8 市街地型・集落型のゾーニング管理イメージ
ゾーニング管理を進めるための取組

【市街地型モデル】

- 1) 管理強化ゾーン（黄色線枠）での管理捕獲継続
- 2) 市街地侵入ルート管理
- 3) 市街地（青色）内の空き地等の管理

【集落型モデル】

- 1) モデル集落のフォローアップ
- 2) 各集落（桃色円をイメージ）へ取組み展開

【生息地域】

- 1) コア生息地域（緑色）を森吉山等山岳地域